

「阿波踊り」の「女踊り」の確立における複合的まなざし

小林 敦子

1. はじめに

近年歌いながら踊るアイドルグループが人気であり、動画共有サイトで視聴するだけでなく、模倣して踊り娯楽として楽しむ若者も多い。このようないわゆるアイドルダンスやストリート系ダンスでは男女差が希薄であり、男性あるいは女性のみ許容されるダンスや振り付けはない。本稿が対象とする「阿波踊り」は藩政期から続く徳島市の盆踊りを由来とする観光化された民俗舞踊であり、男女差の希薄な自由度の高い踊りから、「女踊り」および「男踊り」という男女差の明確な様式が生まれた。毎年「徳島市阿波踊り」(8.12-15)として徳島市中の屋外演舞場および屋内舞台で多数の集団(連)による公演が行われるが、昭和初期までは市民が自由に集団(職場・町内会・友人など)¹を組み、賑やかな三味線のお囃子に合わせて踊りながら路上を練り歩いていた。昭和初期から観光政策が開始され、宣伝と共に審査所と審査基準の設定が行われた²。その後審査場は廃止され、屋内外の設営された舞台でスケジュールに合わせて踊る形式となった。戦後は飛躍的に県外観光客が増大し、さらに東京都杉並区高円寺を初め全国で祭りとして行われるようになり、現在は約60か所で阿波踊りに関するイベントが開催されている。「阿波踊り」は「手を挙げて足を運べば阿波踊り」(俳人岸風三樓作)と言われたようにシンプルな所作で基本的に自由な乱舞であり、男女差や年齢差に関係なく誰もがその楽しみを享受できる特徴があった。しかし1960年代に女

¹ この集団は連と呼ばれ、中でも「阿波踊り」における2大組織(「阿波おどり振興協会」あるいは「徳島県阿波踊り協会」)に所属する34の連を有名連という(阿波おどり会館HP、2022.8月現在)。有名連は観光名物としての「阿波踊り」の中核を担う連である。

² この審査基準により洋装や洋楽器、十名未満の団体が排除され、衣装を揃えることが基準とされた(1936.8.29「徳島毎日新聞」)。

性の踊りが徐々に変化し、男性とは異なる所作の様式化された「女踊り」となった。

「女踊り」は観客の目が作りだしたとされる(朝日新聞徳島支局 1992:62)。本稿では「阿波踊り」の「女踊り」の確立において、踊り手および踊りを見るまなざし、具体的には新聞記事におけるまなざし、写真撮影者のまなざし、踊り手自身のまなざし、屋内舞台の観客席からのまなざしなどの複合的まなざしがどのように影響しているかを論じる。本稿ではまなざしを対象となるものから何かを見出そうとする視線とし、女性の踊りがこの視線に影響されて変化していくことを論じる。研究方法は、新聞および雑誌を主とする文献調査、映像資料の視聴、「阿波踊り」実践者へのインタビューであり、直接引用はしないが「阿波踊り」公演と練習の観察も含む。年号は西洋暦とし必要に応じ和暦を併用する。個人名は姓のイニシャルで示す。画像は徳島新聞社提供、静止画は日本放送協会提供である。

II. 現代の「阿波踊り」における「女踊り」および「男踊り」の特徴

「阿波踊り」は明治期に「踊人は双手を挙げ一種奇妙なる舞踏をなし」(加藤 1894:14-15)と記されているように、両手を挙げてお囃子のリズムに合わせて動かしながら進んで行くことが標準形であり、「思い思いの服装、思い思いの手振りで練歩き」(小寺 1975:128)とされていることから、両手を挙げて前進するという標準動作の他は決まった振り付けはなく自由であった。現代の「男踊り」と「女踊り」の特徴を表1, 図1-2(筆者作成イラスト), 写真1-3(筆者撮影, 2015.7.22/24, 阿波おどり会館, 徳島市)に示す。写真3は「女踊り」の足運び(爪先立ちを保持)を示す。

表1 「男踊り」と「女踊り」の特徴

比較項目	男踊り	女踊り
衣装	着流し(男性用浴衣)又は法被	浴衣(下駄・黒縹子帯・編み笠)
足運び	外輪	内輪・下駄の爪先立ちを保持
踊りの特徴	ある程度自由性がある	統一性が高い



図1 「男踊り」



図2 「女踊り」



写真1 男踊り



写真2 女踊り



写真3 爪先立ち

III. 女性の踊りの変化—1960年代—

III. 1 女性の踊り手の導入とその要因

[三味線奏者としての女性と花街の影響]

戦前の「阿波踊り」に関する写真としては、明治後期から昭和初期に撮影されたものが見出せる(徳島新聞社, 1980:41-166)。それを見ると、花街の芸技、舞子、娼妓の集団、カフェの女給の集団、職人の集団、日本舞踊や長唄三味線の師匠と弟子達の集団、町内会の集団(一部は子供の集団)、洋装のモダンボーイの集団等がある。三味線のみあるいは三味線と鼓のお囃子奏者の集団も見られ、このような集団に踊りたい者は自由につき踊っていた(飯田 1964:55)。三味線奏者は写真で見る限りほとんどが女性であり、女性は踊り手でもあったが、何より三味線奏者として位置づけられていたようである。「阿波は芸所」と言われるが、「町内に3-4人は必ず三味線の弾ける男女があり、お盆に入ると各町内で踊りの連が作られていた」(瀬戸内 2004:4-5)と

されるように、豊かな三味線文化があった。

さらに大正期は「盆踊りの主役は富田町、内町、秋田町三検番の芸妓娼妓の総出であろう。」(松本 1980:31)と言われていた。芸妓による単発的な「阿波踊り」の県外公演は大正期から行われ(関 2007:12)、観光政策開始後も「県外へくる宣伝隊などはたいてい芸者衆ばかり」(1954. 8. 15『徳島新聞』)とされる程に、芸妓の集団が「阿波おどり」キャラバン隊として県外に派遣されていた。また昭和初期に開始された観光政策では、まず秋田町遊郭および南郭取締事務所に審査所が設けられ、地元日刊紙の記者と南廓役員が審査員となり、選抜された団体には米などの商品が、また漏れなく優勝旗が贈呈された(三好 1980:235-236)。このように、観光のための「阿波踊り」は地元新聞社と花街および遊郭の関係者により形成された面が大きい。戦後も昭和30年代では連の三味線奏者は芸妓出身者が多く、当時有名連に所属していたある踊り手は、花柳界の芸妓たちの連や隣組が集まった連がほとんどで30人程度が主流であったと述べている(徳島出版2000:26)。このような「阿波踊り」における花街および芸妓の寄与が大きかったことは、「阿波踊り」における女性の踊り手へのまなごしにも影響したと考えられる。その後花街は衰退し、お囃子楽器に鉦、締太鼓、大太鼓、笛が導入され大音量となり、踊り手の数も増大し、現在の有名連は100人から300人台の大所帯となっている。

[踊り手としての女性]

戦前の「阿波踊り」は男女とも現在の「男踊り」に近い所作で踊る人が多かった(朝日新聞徳島支局 1992:62)とされるように、どちらかという男性の踊りであったようである。現在「阿波踊り」の連は男女の踊り手とお囃子奏者を擁するのが標準形となっているが、1960年代以前に創設された連は、創設当時は男性のみあるいは数名の女性の踊り手から構成される連が多かった。表2は、昭和30年代以前に創立された有名連の創設時の踊り手の男女構成とその後の変化を示す。表2からもわかるように、踊り手が男性のみであった連が1960年代に女性の踊り手を導入していった経緯が認められる。

表2 有名連における踊り手の男女構成の変化例

設立当時の名称(設立時期)	現在の連名	踊り手の男女構成の変化
のんき連(1925)	のんき連	男性のみ→女性を導入 導入時期は不明
藤本連(大正期)	蜂須賀連	女性のみ→'56頃男性を導入

オール前川娯茶平倶楽部(1946)	娯茶平	男性のみ→'63女性を導入
阿呆連(1958)	阿呆連	当初から数名の女性が在籍
うずき連(阿波商業銀行有志)(1956)	うずき連	男性のみ→'63女性を導入

『阿波踊り撮った踊った40年』(津田幸好, 1987)/『娯茶平』(1996, 岡秀昭)/『うずき連40年のあゆみ』(1998, うずき連)/各連へのインタビュー(対面・メール・電話)より筆者作成

〔新聞における女性の踊り手への言説の変化〕

女性の踊りが導入されるようになったのは、女性の踊りの変化、それ以前の女性の踊り手へのまなざしの変化が1960年代に起こったためと考えられる。まず『徳島新聞』における言説の変化を見てみよう(表3)。「阿波踊り」は老若男女の踊りと言われていたが、1950年代の「阿波踊り」に関する記事では、「満月に踊る! 歓喜の大群像」という大見出しと共に「老婆や三つの稚児さん」という小見出し(1950.8.29)や、高齢者の集団(65-90歳)の写真が掲載される(1953.8.26)などこの特徴に沿った言説が見出される。

表3 「阿波踊り」記事における女性の踊り手に関する言説
(『徳島新聞』1950-60年代)

掲載日	記事における言説
1950.8.29	「老婆や三つの稚児さん」
1953.8.26	「全市、人に埋まる 九十歳組も浮かれ出す」
1962.8.14	「ピンクのけだしのあだっぼさ」(注: けだしは着物の下に着る腰巻)
1962.8.16	「阿波踊りは阿波美人のコンクール」 (18-22歳の女性踊り手の写真掲載)
1967.8.11	「こぼれるような色気をみせる女の踊り」
1967.8.18	「踊る阿波娘」(若い女性と少女が踊る写真掲載)
1967.8.18	「工場内で踊る東邦連の娘踊り子たち」(注: 東邦は東邦レーヨン(株))
1969.8.15	「阿波娘男踊りですべり出し 徳島駅前で」

しかし1960年代になると高齢者の踊りが掲載されなくなり、「踊る阿波娘」(1967.8.18)などの呼称で若い女性のみが取り上げられ、「こぼれるような色気をみせる女の踊り」(1967.8.11)等女性らしさやセクシュアリティを見出す言説が増える。「阿波踊り」もそれまでの踊り方の記事では男女差が示さ

れていなかったが、1967年に写真で示された女性の踊りの足運びが内輪の爪先立ちとなり、男性の踊りとは明確な差異が示され、「女踊り」という呼称も見られ(1967.8.15)、「女踊り」の確立が見出せる。民俗学者の宮本常一は、1967年発行の著書で「阿波おどり」について、「長い間この踊りを踊って楽しんできた老人が踊りを奪われて楽しみがなくなったと話していた」と記し、この理由を「市は市民が勝手気ままに踊ることをとどめ、服装を一定し、また踊るグループをつくらせて、その認可したもののみ踊らせることにした。」とし、「見せるための芸能」はもはや民俗芸能とはいえないのではないかと批判している(宮本 1967:201-202)。女性の踊りの変化と女性の踊り手に関する言説が変化し、若い踊り手のみが取り上げられることは連動していることがわかる。

〔「ミス阿波踊り」の選定〕

さらに1965年からは「ミス阿波踊り」の募集(年間10人)が徳島新聞社により行われた。これまでも「ミス徳島博」³に選出された女性が当時女性の踊り手がいなかったある有名連の九州遠征に起用されたり、同じく「ミス徳島博」に選出された別の女性が阿波踊りポスター用モデルに起用される(1981.8.13『徳島新聞』)等の例はあったが、「阿波踊り」の女性連員そのものがいわゆるミスコンの対象となったわけである。ところで徳島県におけるミスコンの嚆矢は戦後2年目に行われた「ミス・トクシマ」(1947, 徳島米国軍政部協賛, 徳島民報社主催)であり、この時は県下8か所で地方予選が徳島市役所で中央審査が行われた(徳島民報社, 1947)。主催の徳島民報社は1954年に徳島新聞社に吸収されており、徳島新聞社はすでにミスコンの経験知があったということであろう。

「ミス阿波踊り」は選抜阿波踊り大会でお披露目され、様々な対外的イベントで「阿波おどり」の宣伝隊となる。例えば1968年に「ミス阿波踊り」になった「うずき連」の連員は、テレビ番組(「ヤング720」等)に出演し⁴、いくつかのホテルのイベントに参加している(うずき連 1998:52)。若く美しい踊り手は「ミス阿波踊り」として県外に遠征し、全盛期であったテレビ放送等のメ

³ 「徳島産業科学大博覧会」(1958.3.20～1958.5.10日, 徳島市徳島公園及びその付近一帯, 徳島県徳島市が主催)に合わせて選出された女性コンパニオンである。

⁴ 『ヤング720』(ヤングセブンツーカー)は東京放送(TBS)制作の音楽とトークによる若者向け情報番組(放送期間:1966-1971)である(株式会社東京放送 2002:217)。

ディアに類出する機会を得ていた。この広告塔という機能は、かつて芸妓キャラバン隊が担っていたものである。現在は「ミス阿波踊り」の選定は廃止されており、「徳島観光大使」(年間2名)が「阿波踊り」を含め徳島県全体の宣伝の役割を担っている(2016.1.13, 徳島市観光協会へのインタビュー)。

また「ミス阿波踊り」以外にも若い女性の選定が『徳島新聞』で何度か行われている。例えば1966年の記事では、「阿波むすめ競演」というタイトルで若い女性(14～24歳)の踊り手20人の写真が掲載され(1966.8.18)、1971年には「娘踊り子ベスト10」として、各連から若い女性(18歳～22歳)10人の写真が身長情報(153cm～163cm)と共に掲載されている(1971.8.15)⁵。

[連の人気投票]

「ミス阿波踊り」の選定に先駆けて昭和30年代には一般市民のアンケートによる連の人気投票が行われているが、これは連同士の競争意識を高めたと思われる。連の人気投票は徳島新聞社、歯磨き会社や製菓会社等の主催あるいは共催により行われた。一般市民が葉書に連の名前を書いて投稿し、応募総数の大きな連とその応募者に後援会社から商品が贈られる形式であった(1955.8.13, 1960.9.6, 1962.8.15, 1964.8.15『徳島新聞』)。

[新聞紙上における代表的踊り手の掲載]

連の人気投票と共に、各連からの代表的な踊り手も『徳島新聞』紙上で掲載されている。画像1は1967年に掲載された各連選出の代表的踊り手の全身写真である(1967.8.16)。20名の踊り手の平均年齢を男女別にみると、男性は28歳(8名)、女性は22歳(12名)と若く、特に女性の若さが顕著である(表4)。これは「名調子 あなたが選ぶ踊り子」と題され、男女踊り手の全身写真・連名・名前・年齢が記載され、人数分の地元企業の広告も掲載され、人気踊り手と企業広告のタイアップともいえる。さらに翌年に行われた「名調子阿波の踊り子40態」という記事(1968.8.15)でも各連から選出された40人の踊り手が掲載され、平均年齢を男女別にみると、男性29.0歳(24名)、女性22.0歳(16名)と若く(表5)、特に女性は16名中13名が18-22歳であり、当時のいわゆる「お年頃」世代に集中している。残り3名の内2名は男装して「男

⁵ これに限らずこの時代は新聞や雑誌等において個人名が、時には町名までの住所、身長および体重が掲載されていた。個人情報の保護に関する法律の成立は2003年である。また現在は女性の踊り手に求められる身長は少なくとも160cm以上のものである。

踊り」を踊る女性であり、1名は当時の「女踊り」の名手として有名であったN氏である。すなわち男女ともに20代の若い世代、特に女性は「男踊り」を踊ったり名手とされる1名のベテラン以外は、18-22歳の踊り手が代表的踊り手として企業広告とのタイアップで取り上げられている。これは各連から抽出された踊り手であり、連員全体では平均年齢はもっと高いはずである。しかしこのように若い踊り手のみが前景化されることは「阿波踊り」における踊り手、特に女性の踊り手が若いという印象が作られ前提とされるようになり、連員全体、特に女性の若年齢化に影響があったと言えるだろう。後には「ほとんどの連が、中、高校生を主体にする女踊り」(朝日新聞徳島支局1992:63)という状況になっている。



画像1 各連選出代表的踊り手
(1967.8.16『徳島新聞』)

表4 各連選出代表的踊り手の
男女別平均年齢

性別	平均年齢	人数
男性	28	8
女性	22	12

(1967.8.16『徳島新聞』より筆者作成)

表5 各連選出人気投票候補踊り手の
男女別平均年齢

性別	平均年齢	人数
男性	29.0	24
女性	22.0	16

(1968.8.15『徳島新聞』より筆者作成)

[写真コンクール撮影会]

昭和30年代は一般大衆にカメラが普及し、写真コンクールが行われるようになった時代である。この時期に「阿波踊り」も被写体となり、例えばある有名連は「徳島県下はもとより四国各県、大阪、名古屋など続けざまにフィルム会社の撮影会のモデルになった。」(津田1987:32)とされるように盛んに撮影会が行われた。「阿波踊り写真コンクール」(徳島新聞社主催)は1954年から現在まで行われており、一般人が撮影した「阿波踊り」に関する写真のコンクールである。このコンクールに先立ち、プロのカメラマンが一般の

人々に写真撮影の方法を教える撮影会が行われた。画像2はこれに関する新聞記事(1967.8.16)であり、当時人気のタレント(藤純子、葉山葉子、生田悦子)を呼び、「ミス阿波踊り」10人(画像2では「阿波踊り」衣装を着け岩畳に前後して並びポーズをとっている)を被写体として撮影のレクチャーが行われることが書かれている。すなわち撮影会に行くと人気タレントと「ミス阿波踊り」に会い写真を撮ることができる企画である。画像3は、やはり人気タレント(鹿取洋子、芦川よしみ)およびミス・ユニバースを呼んで行われる「特別大撮影会」(徳島新聞社、徳島県カメラ商組合共催)の告知記事である(1985.8.15)。

このような撮影会は、写真撮影の方法を学びたいという動機だけではなく、人気女優やタレントに会ってみたい、撮影してみたいという動機付けに十分であろう。また単に写真撮影の方法をアドバイスするだけでなく、プロフェッショナルな若さと美の象徴である人気タレントおよび女優と「ミス阿波踊り」が被写体として同列に位置付けられることにより、新聞紙上の言説よりもさらに効果的な若く美しい女性の前景化と、女優やタレントと一般人である「ミス阿波踊り」との境界の希薄化に寄与したと考えられる。



画像2 写真撮影会の記事
(『徳島新聞』1967.8.16)



画像3 写真撮影会の告知記事
(『徳島新聞』1985.8.15)

[写真雑誌の表紙]

「阿波踊り」における若く美しい女性の前景化の例として、『徳島グラフ』の表紙の例を挙げておきたい。『徳島グラフ』は「阿波踊り」の他、観光地、地域産業、文化遺産等を扱う写真雑誌であり、1952年に徳島新聞出版部から創刊号⁶が発行されており、1962年からは徳島出版(株)に発行元が変更され、

⁶ 創刊号のみ雑誌タイトルが「新しい徳島県」となっている。

2010年で廃刊となっている。花街（徳島市富田街）の芸者もトピックとして取り上げられ、1960年代以降は表紙に「阿波踊り」の女性踊り手（一人のアップあるいは複数が踊っている場面等）が掲載されている。さらに1979年から1990年までは表6のように表紙には当時人気のタレント、女優、アイドル歌手の「阿波踊り」衣装を着たアップの写真が使われている。

表6 『徳島グラフ』の表紙に掲載された芸能人名（徳島出版，1979-1990）

1979	1980	1981	1982	1983	1984
桜田淳子	香坂みゆき	榊原郁恵	松本伊代	浅野ゆうこ	鮎川いずみ
1985	1986	1987	1988	1989	1990
岩井小百合	田中好子	金沢明子	五月みどり	大西結花	原田ゆかり

*1992年からは「阿波踊り」の一般人の写真が使われている（1991年は徳島県立図書館に所蔵がなく確認できなかった）

画像4は1985年版の『徳島グラフ』の新聞記事における広告（1985.8.15『徳島新聞』）である。当時のアイドル歌手（岩井小百合）が「阿波踊り」衣装を身に付け踊りのポーズをとっている。ここでも写真コンクールの撮影会と同様、若さ、美しさ、人気の象徴であるアイドル歌手（プロの芸能人）と「阿波踊り」の踊り手（一般人）との境界の希薄化が起きている。『徳島グラフ』の表紙は1992年からは「阿波踊り」の主として女性の踊り手に戻っているが、これはおそらくバブル経済の崩壊等により経費の節約が必要となったためであろう。画像5は女性の踊り手のアップ画像が掲載された1998年の表紙であるが、画像4と並列すると、いずれもが若さと美の象徴となっていることが見出される。



画像4 『徳島グラフ』の広告
（『1985.8.15『徳島新聞』）



画像5 『徳島グラフ』の表紙
（徳島出版，1998）
筆者により一部加工

[屋内舞台における公演]

このように女性の踊りが男性とは異なり、女性らしさや女性としてのセクシュアリティを醸し出すものとして取り上げられていく中、1964年に開催される予定の東京オリンピックの前夜祭に日本の芸能として「阿波踊り」が出演することになり、各連からメンバーを選抜して選抜連を結成するため、その選抜を兼ねて初めて屋内舞台（徳島市文化センター、2017年閉館）で「選抜阿波踊り大会」が行われた。そしてこの「選抜阿波踊り大会」が始まってから各連は舞台演出を考えるようになり、例えば「まずは女踊りは足運びを揃えて」踊るようになった（阿波踊り情報誌「あわだま」編集部 2012:23-24）とされる。それまで「阿波踊り」は屋外の路上か旅館やホテルの宴会場で踊られることはあったが、初めて舞台用の照明を受けながら多数の着席観客に見られることになった（津田 1987:48-49）。ここで演出を加味した舞台踊りとしての「阿波踊り」が求められることになり、男性の踊りは「阿波踊り」の特徴である自由性や個性が保持され、女性の踊りにはまず足元から揃えることが求められた。ここが女性の踊りと男性の踊りとの分岐点と言えるだろう。舞台演出上揃えることが必要とされたこと、またそれが特に女性の足運びに求められた点に着目しておきたい。これは女性の踊りが男性とは異なるものとして様式化される要因として留意すべき点である。

III. 2 「女踊り」が確立する過程

[平踏みから爪先立ちへ]

では女性の踊りは何時ごろからどのように変化したのだろうか。「女踊り」と「男踊り」の最も大きな差異は、「女踊り」は足袋と下駄を履き爪先立ちを保持して内輪の足運びで進み、「男踊り」は足袋のまま外輪で地を踏んでいく足運びにある。そこで昭和30年代から40年代にかけての写真と映像から足運びの変化をたどってみたい。表7は、この結果を時系列で示したものである。

表7 女性の踊りにおける足運びの変化

No	年代	資料の種類と足運びの内容
1	1957	[映像] 映画の「阿波踊り」場面、女性の踊り手全員が平踏で内輪の程度小
2	1960頃	[写真] ある有名連の踊り場面、名手N氏含め全員が平踏み
3	1962	[写真] 同一連内の女性数人において平踏みと爪先立ちが混在

4	1964	[映像]NHK 番組, 名手 N 氏が内輪の爪先立ち
5	1967	[映像]映画の「阿波踊り」場面, 連の女性(少女含)が全員内輪の爪先立
6	1967 8.15	[新聞記事における写真・図・説明]「阿波踊り」の踊り方の説明 男女で異なる足運びの図と女性は内輪の爪先立ちがわかる写真と説明
7	1970	[映像]NHK 番組, 女性は爪先立ち

1 は足運びの変化を女性の足元がわかる映像として筆者が視聴することができたものの初出であり、1957(昭和32)年公開の映画「集金旅行」(松竹, 中村登監督)の「阿波踊り」場面である。ここでは複数の連の多人数の女性が踊っている様子がわかるが、女性の踊り手は列を揃え、全員が平踏みで踊っている。また足を蹴り上げて接地させる時も内輪の程度は小さい。この時4つの有名連が撮影に参加している(津田1987:29)。

2(写真4)は昭和30年代(1955-65)とされるある有名連の踊りである。中央の女性は当時女性の踊り手の名手と言われていた N 氏である(阿波踊りシンポジウム企画委員会2007:85)。足元を見ると爪先立ちではなく平踏みである。また右斜め後ろの女性も平踏みである。左斜め後ろの男性と比較すると、腕の高さがあまり変わらず男女差が希薄である。

3は1962(昭和37)年の『徳島グラフィ』(徳島出版編)の表紙で数人の女性が踊っている写真であり、同じ浴衣を着ているが、平踏みの人と爪先立ちの人が混在している。すなわち同一連内で平踏みの女性と爪先立ちの女性がいたことがわかる。連内の統一性が現在ほど高くなく、自由性があつた時代である。

4の静止画1および静止画2は、1964年NHKにより放送されたテレビ番組「新日本紀行」における女性の踊り手の足元を示す映像から抽出された静止画である。静止画1は名手とされた女性の踊り手 N 氏の足元である⁷。静止画2は他の踊り手の足元である。N氏は爪先を地に刺すようなしっかりした足運びであり、画面上では周囲には女性の踊り手はおらず一人で踊っていた。この番組内で爪先立ちの足運びで踊っていたのは N 氏のみであり、その他の女性の踊り手は、映像からわかる範囲では静止画2に見られるような平踏みであった。N氏の所属連の他の女性の足運びについては不明である。

⁷ 番組では、N氏が女性の踊り手の名手として演舞場で踊る場面だけではなく、夜間に神社の境内で練習する場面や、家庭で子供たちに食事をさせる場面などもあり、この番組内では個人として最もクローズアップされている。

5は1967年公開の映画「喜劇団体列車」(東映, 瀬川昌治)である。ある有名連が演舞場を行進する場面があり、女性はみな(7歳ぐらいの少女も)爪先立ちを保持し踊っている。

6は同じく1967年の「阿波踊り」に関する徳島新聞の記事であり、踊り方が文章、写真、足運びの図により男女別に示されている。足運びを男女と比較すると、女性は蹴り上げた遊脚を支持脚の前に交差させ爪先立ちで踏み、男性は遊脚を前に出して軽く接触させ、大きく前に出して踏む。ここでは女性は下駄の爪先立ちが保持され、足も交差しながら進んでおり、1964年のNHKテレビ番組「新日本紀行」の映像で名手とされる女性の踊り手と同じ踊り方である。また1967年の記事では踊り手自身の性別を表す「男の踊り」および「女の踊り」という表現と、確立した様式を表す「男踊り」および「女踊り」という表現が混在している。踊りに付せられた形容句に着目すると、「男の踊り」には「ほとばしるような力強さ」、「女の踊り」には「こぼれるような色気をみせる」と踊り手の性差による雰囲気を示す表現がある。さらに「男踊り」には「ダイナミックな」、また「女踊り」には「静かな」という各々対比的な形容句がついている。ここでは、男性と女性の踊りが単に踊り手の性差により醸し出される踊りの雰囲気だけではなく、動作そのものが対比的な様式化された踊りとして表現されている。ただし「爪先立ち」という語彙はない。



写真4 「阿波踊り」(昭和30年代)
(『阿波踊り』2007:85)



静止画1 爪先立ち



静止画2 平踏み

NHK 番組「新日本紀行」
1964.9.7 放送 (NHK 提供)

7はNHKテレビ番組「新日本紀行 阿波踊り考」(1970.8.31放送)であり、女性はみな同じように爪先立ちで、男性は外輪で遊脚の出し方に個人によりいろいろな足運びが見られ、男女差が明確になっている。また「女踊りは、そろいの衣装で形の揃った美しさを強調しています。」および「男踊りは踊り手の個性がみどころです。個々人の持っている踊りの雰囲気から踊りの型が生まれます。」と、「女踊り」および「男踊り」という呼称を用いながら、男女の踊

りの明確な差異に言及しており、それらの特徴はほぼ現在につながるものである。

〔なぜ内輪の爪先立ちか〕

「女踊り」は、1960年代より女性の踊り手、とりわけ若い女性が前景化される事象において、特に足運びが「内輪の爪先立ち」に変化し、これが様式化することにより確立した。ではなぜ「内輪の爪先立ち」なのだろうか。若い女性が前景化されるときに用いられた女性らしさや色っぽさという言説とどのように関連するのだろうか。

まず女性の踊りの動作において、なぜ上肢ではなく下肢、それも足元が特異的な変化をしたのだろうか。これについては、1950年代に一般大衆にカメラが普及し足元を頻繁に撮影されるようになり、足運びを美しく見せたいという意図からという説がある⁸。女性の踊り手の足元は現在でも雑誌等の写真によく取り上げられる(画像6, 画像7)。遊脚を挙げ、着物の裾がひるがえる瞬間は他誌にも頻繁に採用されており、人気であることがわかる。またある18歳の女性の踊り手は、「足の上げ方、女らしい足の表情をと鏡に写して毎日研究中。」であるとしており(1983.8.13『徳島新聞』)、踊り手自身もかなり意識している。



画像6 『徳島グラフ』の記事
(徳島出版 1966)



画像7 『てんとう虫』表紙
(アラック, 2015)

内輪については、歌舞伎舞踊における女性役の踊り手の足運びの特徴と一致する。内輪で歩く動作は、歌舞伎役者である初代中村富十郎(1719-1786)が、

⁸ これは、徳島市のふれあい健康館で行われている「阿波踊り」の実技講座(「阿波おどり講座」, 2014.10.17, 徳島市生涯福祉センター, 徳島市)の参加者(高齢者)から、1960年代の「阿波踊り」の記憶として伺った。

女形として女性らしい所作として編み出したものとされる(武智 1978:252)。これは女性の踊りに関する女性らしい所作という言葉に合致している。しかし内輪の足運びという所作は民俗舞踊では一般的ではない。雑誌『民俗芸能』の企画として1967年に行われた「民俗芸能の再創造と舞台化」という座談会において、民俗舞踊と日本舞踊ではテクニックが全く違うのでは、という山路興造(民俗学・芸能史研究)の問いかけに対し、清水和歌(日本舞踊家)が、日本舞踊の素養がある人に民俗舞踊を教えると、どうしても足を内輪にしてしまいうまくいかない、と指摘している(民俗芸能の会 1967:55)。このように専門家には、民俗舞踊では女性の足運びは内輪ではないと認識されている。「阿波踊り」において女性の踊り手が内輪の所作を取り入れたことは、民俗舞踊において一般的ではない日本舞踊の所作を取り入れた例と言える。内輪の足運びが「阿波踊り」の女性の足運びに導入されたのは、それが女性らしい所作と認識されていたからであろうが、「阿波踊り」においては日本舞踊の習得者でもある芸妓の役割が大きく、徳島市中では日本舞踊を習う女性が多かったことも背景にあるだろう。

爪先立ちを保持する所作を最初に行った踊り手が誰かはわからないが、表7の4の当時の女性の踊り手の名手とされたN氏の影響力が大きかったことは確かであろう。後にN氏が所属していた有名連に入連しN氏の踊りの記憶があるS氏によれば、N氏はどちらかというとな男性的な踊りであり、所属連の男性の足運びから編み出された所作ではないかという(2020.1.30, S氏への電話インタビュー)。この連の男性の足運びは爪先を地に刺すような接地の方法で「さし足」と呼ばれていた。つまり、N氏は所属する連の男性の足運び「さし足」がN氏の美学から好ましい所作であり、爪先立ちを保持する足運びをしたと考えられる。男性は足袋なので「さし足」で接地するとそれが特徴的な所作となるが、女性は下駄を履いているので爪先で接地させてもその後平踏みで踏むとあまり明確な特徴とはならない。爪先立ちを継続させて踊れば、さし足の美学が生かされた明確な特徴的な所作となる。

爪先立ちの導入については、もう一つ「演舞場を一定の速度で進むのに都合がよいから」と言われることがあり、これはS氏も同意している。演舞場により距離の違いはあるが踊り手は約100メートルを前進速度を管理しながら行進する必要があるため、爪先立ちの方がスムーズに前進できるという説である。演舞場の公演はスケジュール管理されており、各連は持ち時間(約10分)通りに進まなければならない。路上を各々のペースで行進していた戦前には必要とされなかったことである。

内輪の所作を取り入れた最初の踊り手がN氏かはわからないが、1964年のNHK番組の映像では、N氏の足運びは爪先立ちと共に内輪の程度が大きく非常に特徴的である。N氏の影響力の大きさを考えると、この明確な内輪の爪先立ちの保持が女性の踊りとして様式化されたことは確かであろう。

[女性の足運びの統一化による様式化]

N氏の足運びがひな形とされた事は想像に難くないが、それが所属する連のみならずほとんどの連の女性の踊り手にあまねく行き渡るには、その影響力というだけではやや説得性に欠ける。ここで思い起こされるのは、初めて屋内の舞台で行われた1964年の「選抜阿波踊り」であり、この「選抜阿波踊り」以降「まずは女踊りは足運びを揃える」ようになった(阿波踊り情報誌「あわだま」編集部 2012:23-24)ことが、女性の足運びの統一化に大きく寄与したと考えられる。

IV. 「女踊り」確立における複合的まなざし

[若く美しい女性を抽出するまなざし]

ここまで本稿では、大正期から昭和初期における「阿波踊り」の特徴を示し、観光政策が開始され男女差の希薄であった「阿波踊り」において女性の踊りが男性の踊りと差異化し様式化していく過程をたどり、特に1960年代に大きな変化が起こり、内輪の爪先立ちの足運びが様式化し「女踊り」として確立したことを明らかにした。

その結果1950年代までは老若男女誰でもが自由に踊ることが「阿波踊り」の特徴とされ、新聞紙上の言説もこの特徴に沿ったものであった。女性は芸妓であれ一般人であれ三味線奏者として寄与していたが、年齢に関係なく踊り手としても参加していた。しかし観光政策が開始されて以降芸妓が宣伝隊として県外のイベントに派遣されるようになり、「阿波踊り」の女性にはこの芸妓のイメージが重なるようなまなざしができたと考えられる⁹。すなわち

⁹ 徳島市中の盆踊りの観光化は地元新聞記者と花街の検番の主導で開始されている。これらの人々が審査場の審査員となったことは、徳島市中の盆踊りの特徴と言える。例えば1936(昭和11)年に秋田町遊郭・南郭取締事務所審査所が設けられている(審査期間 8.27~29,3日間正午より夜10時、場所:南郭事務所前、審査員:日刊記者と南郭役員、賞品は米、優勝旗は即時全部漏れなく贈呈する)(三好1980:235-236)。その年の地元紙によると徳島観光協会で行われた打ち合わせでは、市・鉄道出張所・徳島駅・料理業・旅館業・富田町秋田町の両検番・共同汽船・自動車業・商工会議所の各代表者と共に花街である富田町および秋田町の両検番が参加している(1936.8.29『徳島毎日新聞』)。

徳島市内では芸妓と共に幅広い年代の女性が踊り手として存在していたが、県外観光客にとっては芸妓が主たる女性のイメージとなっていたと思われる。『徳島新聞』紙上における女性の踊り手に関する言説が1960年代に変化したことは、この芸妓へのまなざしが踏襲されたことに加え、戦後まもなく行われた「ミス・トクシマ」(1947, 徳島米軍政協賛, 徳島民報社主催)の影響も大きいのではないだろうか。これは若い女性踊り手(18-22歳)の写真と共に掲載された「阿波踊りは阿波美人のコンクール」(1962.8.16『徳島新聞』)という文言によく表れている。実際、踊りの名手とされたN氏以外は、ほぼこの年代に限定された女性が連の代表として新聞紙上に掲載されている。

このような女性の踊り手に対するまなざしは、実際に女性の踊り手の低年齢化につながったと考えられる。この時代入連希望者が多く、女性の入連希望者に対しては審査が行われ、「顔がべっぴんでないと入れない」とか「身長は1メートル55センチ以上ないと入れない」と言われてもいた(有名連の元連長の語り, 阿波踊り情報誌「あわだま」編集部2012:162)。特に年齢制限については言及されていないが、おそらく有名連に入連する女性は大半が20代前半までだったのではないだろうか。新聞紙上において女性の踊り手の呼称であった「阿波娘」や「娘踊り子」の世代である。

〔踊りの美学・写真と映像・演舞場の管理〕

では実際に女性の踊りはどのように変化したのだろうか。「内輪の爪先立ち」の足運びの創始者を1960年代の女性踊りの名手N氏と断定することはできないが、N氏の影響力の大きさからN氏自身の女性の踊り手へのまなざしを考えると、N氏の視線は女性の踊り全体というよりN氏自身に、さらには演舞場の観客と足元に着目されやすい写真や映像に写るN氏の踊りに向けられていたであろう。N氏自身がもともと男性的なダイナミックな所作の踊りであり、所属連の男性の足運び「さし足」に感化されて爪先立ちになったとすると、N氏自身のまなざしは、若く美しい女性によるセクシュアリティに着目した新聞紙上の言説とは異なるものであったと言える。そして速度を自己管理しながら演舞場を前進する都合にも良かったということは、単に踊りの所作がどう見えるかのみではなく、舞台の演出上の課題をクリアするという視点も含まれていたと言ってよいのではないだろうか。

一方で爪先立ちとは異なり、内輪の所作はやはり女性らしさの表現として行われたのだろう。N氏に日本舞踊の素養があったかはわからないが、花街が隆盛していた徳島市において「阿波踊り」では芸妓や日本舞踊を習う少女

の集団が繰り出し、「阿波踊り」だけではなく手踊りと呼ばれる日本舞踊も披露していた（徳島新聞社 1980:85）背景を考えると、女性の踊りの所作として内輪の足運びは身近だったのではないだろうか。

〔「選抜阿波踊り」による女性の足運びの統一化〕

内輪の爪先立ちという足運びはある時から全女性の踊り手が一斉に始めたのではなく、1962年の『徳島グラフ』の表紙の写真では同一連内の女性で爪先立ちと平踏みが混在しており、1964年の映像（NHK「新日本紀行」）に映し出された踊り手の中では内輪の爪先立ちはN氏のみであった。それが1967年の新聞紙上における「踊り方」の説明では女性の踊り方が明確に内輪の爪先立ちになっている（1967.8.15 [28]『徳島新聞』）。この3年間に何が起こったのだろうか。最も考えられるのは、初めて屋内の舞台で行われた1964年の「選抜阿波踊り」であり、この「選抜阿波踊り」以降ある連では「まずは女踊りは足運びを揃える」ようになった（阿波踊り情報誌「あわだま」編集部 2012:23-24）とされることである。ここで少なくとも連内に内輪の爪先立ちで前進する女性がいた場合は、全員がその足運びに統一されたのではないだろうか。N氏が所属する連は当然揃えられたことであろう。内輪の爪先立ちの女性がいなかった連はこの時点ではまだ平踏みのままであったかもしれないが、この「選抜阿波踊り」で各連から選ばれた踊り手から構成された選抜連が東京オリンピックの前夜祭に出演する際は、映像がなくて確認できないが、女性は内輪の爪先立ちだったのではないだろうか。

この「選抜阿波踊り」（屋内舞台における観客相手の公演）における女性の足運びの統一化では、何よりも女性の踊り手に対して、きれいに揃った踊りの踊り手というまなざしがある。「阿波踊り」は自由な所作が特徴とされていた事、また男性の踊り手のみで創設された連が多かったため、男性にはその自由性が残され、女性の踊りに新たに舞台踊りで求められる統一性が託されたということであろうか。ところで女性がみな足運びを揃えて内輪の爪先立ちになることは、女性の踊りの名手とされたN氏の本意ではない。N氏は引退後のインタビューで女性の踊りがみな「まるで人形の踊り」であり「自己表現に欠ける」としてかなり手厳しく批判している（1979.8.14 [18]『徳島新聞』）。すなわち女性の足運びを統一することは、この足運びを早期に取り入れたN氏のまなざしで行われたものではなく、舞台での踊りや東京オリンピックの前夜祭というステージでの踊りを見る観客からのまなざしに呼応した連長あるいは連内で踊りの指揮をとる者のまなざしと言える。

[複合的まなざし]

女性の踊りは男性の踊りとは異なるものとしてそこに女性らしさやセクシュアリティを見出すまなざしや、「娘踊り」という呼称、18-22歳の女性踊り手の前景化、「ミス阿波踊り」の選定は、女性の踊り手に若さと美しさを見出すまなざしを形成し、女性の踊り手の低年齢化と一定の身長制限、さらには容姿の審査基準を導いたと言えるだろう。しかし爪先立ちの足運びはこれらのまなざしとは異なり、むしろ男性的な所作に美しさを見出すまなざしが根底にあったようである。内輪の所作はここに女性らしさを補足している。さらにこのような足運びに統一されたことは、舞台上の群舞を鑑賞するまなざしに応じたことであつたと考えられる。「女踊り」が確立する過程では、このような複合的なまなざしが関連していたと考えられる。

V. おわりに

本稿で論じた大正期から1960年代までの「阿波踊り」における女性の踊りの変容を振り返ると、老若男女が自由に踊っていた時代に自分も一緒に踊っているような踊り手へのまなざしから、「阿波踊り」の初期の観光化に寄与した芸妓や「ミス・トクシマ」へのまなざしが抽出され、次に写真撮影される被写体としての足元へのまなざしから内輪の爪先立ちが編み出され、それがステージ上の踊りに向けられる観客のまなざしで統一化されていった過程が見出された。観光化による変化ではあるが、そこに介在するまなざしは様ではなく、メディアが生み出される言説、演舞場で踊る場合の物理的課題、踊り手自身の美学、屋内舞台における観客から求められる統一性など多様なまなざしが関連している。

その後様式化した「女踊り」は踊り手側における人気低下し、「女踊り」ではなく着流し(男性用浴衣)あるいは法被を着て「女の男踊り」を踊る女性が増加する。N氏を輩出した連も公演に参加する女性の踊り手が1人にまで激減した時期があつた(阿波踊り情報誌「あわだま」編集部2012:213)。「女踊り」はN氏の次の世代に名手とされたS氏により1980年代に改革され、再び着目されるようになる。このS氏による改革は初め所属する連の「女踊り」全体に対し行われ、それが他の連にも導入され標準化するという過程をたどる。一方男性のように自由であつた「女の男踊り」も1980年代から徐々に法被着衣の踊りが様式化の途をたどり2000年代には「女ハッピー踊り」という呼称が定着した。現在では連によっては「女踊り」並みに統一性の高い「女ハッピー踊

り」が人気を博している。この過程ではS氏を初め個々人が持つ「阿波踊り」の美学による改革が連全体に適用され、次に「阿波踊り」全体の標準となる中で、各連が保持する特徴や連の独自性を出そうとする意図により別のものが生み出されるという複雑な事象が見出される。しかし1980年代以降その基底には、常にステージ上の群舞としての「阿波踊り」を見る観客のまなざしと、写真や映像にどのように映るかというまなざしがある。

「阿波踊り」には、民俗舞踊が観光政策によりステージダンスとなる過程における流行と変容、メディアの影響、そしてそこに生まれる複合的なまなざしという研究課題が集約されている。「女踊り」確立以降のこの複合的なまなざしと踊りの変容との関連性については、今後の課題としたい。本稿の作成にあたっては、「阿波踊り」実践者(連)の方々のインタビューへの協力と、「NHK アーカイブス学術利用トライアル」プロジェクト」によるNHKのアーカイブ映像の視聴と、徳島新聞社による記事の画像掲載に関する協力を頂いた。感謝申し上げます。

本研究は、科研費基盤(B)[JSPS 科研費 JP20H01221](代表:波照間永子)の分担者として実施したものである。

引用資料

文献資料

- 阿波踊り情報誌「あわだま」編集部, 2012, 『流儀伝承』, 徳島: 猿楽社
- 朝日新聞徳島支局, 1992, 『阿波おどりの世界』, 東京: 朝日新聞社
- アラック編集部, 2015, 『てんとう虫』, 東京: (株)アラック
- 阿波踊りシンポジウム企画委員会, 2007, 『阿波踊り—歴史 文化 伝統』, 第二十二回国民文化祭徳島市
実行委員会事務局発行
- 飯田義資, 1964, 『阿波踊り』, 徳島: 徳島県教育会出版部
- 株式会社東京放送, 2002, 『TBS50年史 資料編』, 株式会社東京放送
- 加藤重成 1894, 『阿波徳島市の盆踊』, 『風俗画報 第七十七弾』, 東京: 東陽堂, 14-15
- 小寺融吉, 1975 (=1941), 『民俗舞踊と研究』, 東京: 図書刊行会
- 松本進, 1980, 『阿波踊り』, 徳島: 徳島市観光協会
- 宮本常一, 1967, 『宮本常一著作集 第2巻 日本の中央と地方』, 東京: 未来社
- 三好昭一郎, 1980, 『徳島藩と阿波おどり』, 『阿波おどり』, 徳島: 徳島新聞社編集兼発行, 167-242
- 民俗芸能の会 1967, 『民俗芸能』(復刊 10号通巻 29号), 東京: (株)邦楽と舞踊
- 岡秀昭, 1996, 『娯茶平』, 徳島: 娯茶平
- 関宏, 2007, 『阿波おどりの“ひろがり”』, 『阿波踊り—歴史・文化・伝統』, 阿波踊りシンポジウム企画

- 委員会編集、徳島：第二十二回国民文化祭徳島市実行委員会事務局，123-131
- 瀬戸内寂聴，2004，「身も心も浮かれる『よしこの節』の陽気なりズム」、『日本の祭り』，菊池聡編，東京：朝日新聞社，4-5
- 武智鉄二，1978，『武智鉄二全集第一巻 歌舞伎 1』，東京：三一書房
- 津田幸好，1987，『阿波踊り 撮った踊った40年』，徳島：第一出版
- 徳島民報社，1947，『1947年度 ミス・トクシマ』，徳島：徳島民報社
- 徳島出版，1966，1979-1990，1998，2000，2007，『徳島グラフ』，徳島：徳島出版
- 徳島新聞社，1980，『阿波おどり』，徳島：徳島新聞社
- うずき連，1998，『うずき連40年のあゆみ』，徳島：娯茶平

新聞資料

『徳島毎日新聞』（徳島毎日新聞社）

1936年8月29日 朝刊3面「踊れ！踊れ！！」

『徳島新聞』（徳島新聞社）

1950年8月29日 朝刊2面「満月に踊る！歓喜の大群像」

1953年8月26日 朝刊3面「全市、人に埋まる 九十歳組も浮かれ出す」

1954年8月15日 朝刊3面「エライヤッチャエライヤッチャ」

1955年8月13日 朝刊2面「阿波踊り人気投票」

1960年9月6日 朝刊6面「阿波踊り人気投票」

1962年8月14日 朝刊1面「おとこ踊り」

1962年8月15日 朝刊7面「阿波踊り人気投票懸賞発表」

1962年8月16日 朝刊4面「踊りのなかの阿波ムスメ」

1964年8月15日 朝刊6面「阿波踊り人気投票」

1966年8月18日 朝刊5面「阿波むすめ競演」

1967年8月11日 朝刊11面「阿波踊りテレビロケは本番」

1967年8月15日 朝刊28面「県外客のための阿波踊り教室」

1967年8月16日 夕刊4-5面「名調子 あなたが選ぶ踊り子」

1967年8月18日 朝刊1面「踊る阿波娘」

1967年8月18日 朝刊16面「工場内で踊る東邦連の娘踊り子たち」

1968年8月15日 夕刊6-7面「名調子！阿波の踊り子40態」

1969年8月15日 夕刊1面「阿波娘男踊りですべり出し 徳島駅前で」

1971年8月15日 朝刊10-11面「娘踊り子ベスト10」

1979年8月14日 朝刊18面「よしこの人生」

1981年8月13日 朝刊13面「私の阿波踊り今昔(3) 乃一幸子さん」

1983年8月13日朝刊16面「踊り子自慢」

1985年8月15日朝刊40面「特別大撮影会」

ウェブサイト資料

阿波おどり会館・眉山ロープウェイ運営共同事業体, 阿波おどり会館HP,

<https://awaodori-kaikan.jp/> (参照日: 2022年9月3日)

映像資料

(1)NHK 番組

①1964年9月7日放送「新日本紀行」

②1970年8月31日放送「新日本紀行 阿波踊り考」

「NHK アーカイブス学術利用トライアル」プロジェクト(2016年度第3回公募採用)(参照文献:『放送研究と調査』通巻810号, 2018, NHK放送文化研究所)

(2) 映画のVHSビデオ

①「集金旅行」(1957年公開, 中村登監督)のVHSビデオ4, 1984年, 松竹株式会社

②「喜劇団体列車」(1967年公開, 瀬川昌治監督)のVHSビデオ, 発行年不明, 東映